

鬼六

楠山正雄

青空文庫

ある村の真ん中に、大きな川が流れていました。その川は大へ
 ん流れが強くて速くて、昔から代々、村の人が何度橋をかけて
 も、すぐ流されてしまいます。村の人たちも困りきつて、都で名
 だかい大工の名人を呼んで来て、こんどこそけつして流れない、
 丈夫な橋をかけてもらうことにしました。

大工はせっかく見込まれて頼まれたので、うんといつて引き受
 けてはみたものの、いよいよその場へ来てみて、さすがの名人
 も、あつといつて驚きました。ひっきりなし、川の水はくるくる

目の回るような速さで、渦をまいて、ふくれ上がり、ものすごい音を立ててわき返っていました。

「このおそろしい流れの上に、どうして橋がかけられよう。」

大工は、こう独り言をいいながら、ただあきれて途方にくれて、川の水をぼんやりながめていました。

すると、どこからか、

「どうした、名人、そこで何を考えている。」

という者がありました。

大工が驚いて、見まわすとたん、水の上にぶく、ぶく、ぶくと

大きな泡が立ったと思うと、おそろしく大きな、鬼のような顔がそこにぽっかりあらわれました。

大工は、妙な、気味の悪いやつが出て来たと思ひながら、わざとへいきで、

「うん、おれか。おれは頼まれたから、この川に橋をかけようと思つて考へているのだ。」

といいました。

すると鬼は顔じゆう口にして、ぎえツ、ぎえツ、ぎえツと、さもおもしろそうに笑いました。そうして、大きな歯をむき出したまま、

「ふ、ふ、ふ、お前、いくら名人でも、大工にやあこの橋はかからないぞ。」

といいました。

「じゃあ、だれならかかる。」

「そりやあこのおれならかかるよ。」

「じゃあ頼む、お前さん後生だ、代わりにかけておくれ。」

「そりやあかけてやってもいいが、何をお礼にくれる。」

「そりやあかけてくれればなんでも上げるよ。」

「じゃあお前、その目玉をよこせ。」

「なに、目玉だ。」

大工もこれには少し驚きましたが、なにその時はその時でどう

にかなるだろうと思つて、

「よし、よし、お安い御用だ。」

といつて、承知してしまいました。

大工はそれなりうちへ帰つて、ゆつくり一寝入りして、あくる日また、何気なしに川へ出てみました。すると、川の水は一向引いていませんが、まさかと思つていた橋が、半分以上も、みごとにその上にかかっているので、びつくりしました。

「こりやあじようだんじやあないぞ。」

大工は急にこわくなつて、そつと両方の目をおさえました。そこでその明くる日は、朝早くから起きて、また川へ出てみますと、まあどうでしょう、じつにりっぱな橋が、何丈とい

う高たかさに、水みずが渦うず巻き逆さか巻き流ながれている大川おおかわの上に、もうすつかり出来でき上があがつて、びくともしずには、長なが々ながとかかっているではありませんか。大工だいくはこんどこそほんとうに度肝どぎもを抜ぬかれて、ただもう目ばかりきよろきよろさせていました。

すると、そのとたん、れいのどことも知しれない川のそこから、「おい、どうした、大工だいく。さあ、目玉めだまをよこせ。」

といいながら、鬼おにが出て来きたので、「ひやあ。」と一ひと声こえ、すつかり青あおくなつて、ぶるぶるふるえ出だしてしまいました。

「ああ、ごめんなさい、すぐは困こまる。しばらくお待ち下ください。」
大工だいくは泣なくようにいつて、あわててそこを逃にげ出だしました。

逃にげ出だしたものの、どうする当あてもないので、今いまにも鬼おにが追おっかけて来くるかとはらはらしながら、川の岸きしをはなれて山ほうの方ほうへどんどん逃にげて行いきました。

逃にげ出だして、山やまの中なかをあてもなくうろろう歩あるいていますと、どこか遠とおくはやしの林はやしの中なかから、子こ供どもの歌うたう声こえがしました。やがてその声こえはだんだん近ちかくなつて、つい聞きくともなしに、耳みみにはいつてきたのは、こういう歌うたでした。

鬼おに六ろくどうした、

橋はしかけた。

かけたらほうびに、

目玉、早もつて来い。

この歌を聞いて、大工はほっとしました。そうして生き返った

ように、元気をとりもどして、宿屋に帰って寝ました。

その明るる日、大工がまた川へ出ると、鬼はさつそく出て来て、

「さあ、すぐ、目玉をよこせ。」

といいました。

「まあしばらくお待ちください。どうもこの目をとられては、あしたから大工の商売ができません。かわいそうだとおぼしめして、何かほかのお礼でごかんべん願います。」

こう大工がいうと、鬼はおこつて、

「何なんといういくじのないやつだ。じゃあためしにおれの名なを当あててみる。うまく言いい当あてたら、かんべんしてやらないものでもない。」

「いいました。」

そこで大工だいくは、わざとまずでたらめに、

「大江山おおえやまの酒しゆてん顛どうじ童子。」

「という、鬼おにはあざ笑わらつて、

「ちがう、ちがう。」

と首くびを振ふりました。そこでまたでたらめに、

「愛宕山あたごやまの茨木いばらき童子。」

「という、鬼おにはよけいおもしろそうに、

「ちがう、ちがう。」

といつて笑わらいました。

それから、まだいくつも、いくつも、でたらめな名なをいって、鬼おにがだんだん飽あきて、こわい目玉めだまをむいて、今いまにも飛とびかかつて来きそうになつたとき、大工だいくはありつたけの大きな声こえを張はり上あげて、「鬼おに六ろく。」

とどなりました。

「ちえツ。山の神かみに教おそわつたか。」

こういつたとたん、ふつと鬼おにの姿すがたは消きえて無なくなりました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鬼六

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>